

クレジット:

UTokyo Online Education 学術俯瞰講義 2018 下田正弘

ライセンス:

利用者は、本講義資料を、教育的な目的に限ってページ単位で利用することができます。特に記載のない限り、本講義資料はページ単位でクリエイティブ・コモンズ 表示-非営利-改変禁止 ライセンスの下に提供されています。

<http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/>

本講義資料内には、東京大学が第三者より許諾を得て利用している画像等や、各種ライセンスによって提供されている画像等が含まれています。個々の画像等を本講義資料から切り離して利用することはできません。個々の画像等の利用については、それぞれの権利者の定めるところに従ってください。



# デジタル・ヒューマニティーズが照らす 知の過去と未来

学術俯瞰講義(2018年)  
21 KOMCEE レクチャーホール  
(2018/07/09)

下田正弘(東京大学文学部)

# 1. あらたな人間学としてのデジタル・ヒューマニティーズへのいざない

---

## 1. 下田正弘(文学部)

2. 人類は、前世代が記録や痕跡として残したいとなみを、読み解き、読み解くことをとおして、新たな成果を生み出し、さらにそれを記録し、次世代へと引き渡してきました。言語を有し、言語を精緻に発展させた人類は、流動的世界を言語の内部に保蔵し、再度開顕するような力を発揮することで、世界を意味に変えつづけています。デジタル時代に入り、この人間のいとなみは、以前に比して、はるかに先鋭的なかたちで現れつつあります。いま、世界の人文学においてなにが起こっているか、この講義ではその最新のようすをお伝えしたいと思います。

# データ志向AI時代における言語のデカルト的使用について

---

1. 影浦峽(教育学部)
2. メディアはメッセージである、デジタル技術の導入は知識の編成を質的に変える、AIは社会を変える等々といった、相変わらず見られるどころか最近また広まっているようにも思われる粗雑な「命題」は、仮にそれが一定程度の妥当性を有するならば、それらの「命題」そのものをあたかも有意味であるかのように表明することができる条件そのものの検討をも要求しているという点については、論理的に明白であるにも関わらず、極めて都合よく忘却している。本スロットでは、狭義のデジタル・ヒューマニティーズにこだわらず、近代以降において有意味に言語で語る条件を検討する。それはまた、狭義のデジタル・ヒューマニティーズの足元を確認することにも通ずるはずである。

# デジタル時代のcriticism

---

1. 永崎研宣(一般財団法人人文情報学研究所)
2. 紙媒体を前提とした人文学諸分野は、それぞれの研究対象や資料に即した批判的方法論を確立してきた。長い年月と明示的・暗黙的な様々な前提の積み重ねによって成立してきたそれは、大学や出版界、印刷業界といった様々なステイクホルダーによってモザイク状に支えられてきた。紙に書かれ伝えられてきたことをどう扱い、どう理解し、それをもとにしてどのように人間や社会についての思考を深めるべきか、という点について人文学は最先端を切り拓く営みであった。ではデジタル媒体が情報流通・知識伝達の主役となりつつある現在、その批判的方法論はどう構築され得るのか。本講義では現場の実践レベルから立ち上がる議論を通じて検討する。

# デジタル・ヒューマニティーズの歴史に於ける、XMLとTEIの役割

---

1. Albert Charles Muller (文学部)
2. デジタル・ヒューマニティーズの歴史は1960年代にさかのぼるが、現実的に言えば、1980年代半ばにPCが登場するまでは広範に発展しなかった。その後、研究者は自分のコンピュータ上でテキストの入力と分析を開始した。すぐ後で、いわゆるマークアップ言語が出現した。最も重要であるのは、SGML(後でXMLに進化する)だった。これらのマークアップ言語が広く使用されるにつれ、人文学者はテキストをタグ付けする体系的な方法が開発される必要があることを理解し、TEIが生まれた。この講義では、これらの開発の歴史の中で最も重要な点について説明し、そして講師が開発し管理するオンライン辞書にXML-TEIを適用した例を示す。

# 知識のインターネット

---

1. 大向一輝(国立情報学研究所)
2. 人々による知的活動の成果を時間や場所を越えて共有するために、知識の記述方法や、その知識に効率よくアクセスするためのよりよい仕組みが常に模索されてきました。インターネットやウェブは分散的な情報管理とリンクによる関係づけによって、情報量の飛躍的な増大と流通の円滑化をもたらしましたが、その先には多様な専門分野を総合的に理解して適切な情報を入手するための手法や、それらの作業を人間だけでなくコンピュータにも可能にするための機構といった新たな課題が浮上しています。この講義では学術情報の分野に焦点を当て、知識共有の歴史について概観するとともに、インターネット上の知識表現とその活用について議論します。

# 人工知能と自然言語処理技術を利用した人文知の構造化

---

1. 美馬秀樹(大学総合教育研究センター)
2. 今や、インターネット上でアクセスできる論文は、生命科学分野だけでも2,000万件を超え、毎月数万件のレベルで増加している。また東京大学で開講されている講義数も、全学で12,000にも及ぶのが実情であり、爆発的に知が増加してきたのが現状である。一方で、それらに対し、知の構造化が十分行われているとは言えず、活用されずに眠っている知が大量にあるのも実情である。
3. 本講義では、まず、このような論文等の大量に蓄積された知に対し、人工知能や自然言語処理を利用した様々な構造化技術を用いて、価値の創出を行う「知の構造化」に対して概説する。知の構造化では、単なる検索に留まらず、上記技術を使って知の分析を行い、分野や時勢を越えた知の関連性を明らかにすることでその活用を促す。特に、人文学における歴史的な文献からの知の構造化に関し、デジタル化等で生じる様々な課題と、その解決に関する技術を解説し、分野や時勢を越えた知の活用に関し、実際の事例を交え講義を行う。



# アーカイブが変えるテレビ研究の未来

---

1. 丹羽美之(大学院情報学環)
2. これまでテレビ番組は「一回放送すれば終わり」「電波とともに消えて無くなるもの」と考えられてきました。しかし、放送開始から60年以上が経ち、日本でもようやくテレビ番組アーカイブの整備がはじまっています。ドラマやドキュメンタリー、ニュースやスポーツ、バラエティや歌番組、アニメやCMなど、過去に放送されたテレビ番組を研究や教育に活用する試みも注目を集めています。アーカイブという新しい技術環境はテレビ研究の可能性をどのように拡張するのでしょうか。最新の事例を紹介しながら、テレビ研究の未来、さらにはテレビの未来について考えます。

# VR2.0の世界

---

1. 廣瀬通孝(大学院情報理工学系研究科)
2. 昨今、VR技術が注目を集めている。VRという言葉がはじめて使われたのが1989年のことであるから、今回は2周目のブームということになる。もちろん、当時と今とでは技術的・社会的な環境が全く異なっており、その意味で現在のVRはVR2.0とでも呼ぶべきものであろう。本講義では、VR技術の過去と現在について解説したうえで、この新しいVR2.0はどう進化していくのか、どうわれわれの考え方や産業や社会に影響を与えていくのかについて、デジタルミュージアムへの応用を中心として、いろいろな角度から俯瞰的に解説していきたいと思う。

# 古代ギリシア・ローマ彫刻と先端技術

---

1. 芳賀京子(文学部)
2. 3Dはすでに生活のさまざまな部分に取り入れられています。美術品や文化財からは次々と3Dデータが取られ、破壊の危機に瀕している文化財の記録やヴァーチャル・ミュージアムの構築などに威力を発揮しています。しかしそのデータは、まだ本当の意味で十分活用されているとは言えません。例えば、3D形状比較の技術を古代ギリシア・ローマ彫刻の研究に用いれば、古代の彫刻工房におけるブロンズ鑄造や、大理石彫像のコピー制作の実態、さらには作者不明の作品の彫刻家の同定など、今まで肉眼では判別できなかったことを突き止めることができるのです。ここ数年の新発見を交えて、古代彫刻研究における3Dデータの可能性を紹介します。

# デジタル・ヒューマニティーズと文化財

---

1. 高岸 輝(文学部)
2. デジタル技術の発展に伴い、古い文化財の保存や公開に関しても新たな潮流が生まれつつある。高解像度の撮影や印刷技術、あるいは3Dプリンタを用いた複製品が、「実物」の文化財に代わって古社寺や博物館・美術館で展示されるようになったのもそのひとつである。本講義では、日本の文化財にかかわるデジタル・ヒューマニティーズ導入の事例を紹介するとともに、その利点と問題点を検証する

# フロイトへの回帰：デジタル・ヒューマニティーズと無意識

---

1. 石田英敬(教養学部)
2. フロイトが1925年に発表した小論「『不思議メモ帳』についての覚え書き」(岩波書店『フロイト全集18』岩波書店 2007)には、iPadやスマホのような情報端末によく似た書記道具のことが書かれています。この小論を手掛かりに、文字の読み書きのコンピュータ化と現代人の無意識の関係を考えます。

# デジタル・ヒューマニティーズと東アジアの人文学

---

1. 齋藤希史(文学部)
2. デジタル・ヒューマニティーズは地域や分野を超えた知の再編を促すうねりである。一方で、東アジアの人文学は、漢字誕生以来の歴史と方法を有している。西洋の学術との接触によって近代社会に位置づけ直され、変貌を遂げた東アジアの伝統的人文学は、現在、デジタル・ヒューマニティーズのうねりと共鳴して、再び、大きな変容を遂げようとしている。本講義では、デジタル・ヒューマニティーズが東アジアの人文学と接続することで何が起こりつつあるのかを概観しつつ、その可能性を展望する。

# 課題

---

## 1. 顕在的次元

1. 共同作業をいかに実現するか
2. プロセスを評価すること
3. 学術基盤の創成
4. 利用者と提供者

## 2. 潜在的次元

1. 意味とはなにか
2. 過去を保存するとは？
3. 本物と偽物？

# 潜在的次元

---

人々がこの文字というものを学ぶと、記憶力の訓練がなおざりにされるため、その人たちの魂の中には、忘れっぽい性質が植えつけられるということだろうから。それはほかでもない、彼らは、書いたものを信頼して、ものを思い出すのに、自分以外のものに彫り付けられたしるしによって外から思い出すようになり、自分で自分の力によって内から思い出すことをしないようになるからである。じじつ、あなたが発明したのは、記憶の秘訣ではなくて、想起の秘訣なのだ。また他方、あなたがこれを学ぶ人たちに与える知恵というのは、知恵の外見であって、真実の知恵ではない。すなわち、彼らはあなたのおかげで、親しく教えを受けなくてももの知りになるため、多くの場合ほんとうは何も知らないでいながら、見かけだけはひじょうな博識家であると思われるようになるだろうし、また知者となる代わりに知者であるといううぬぼれだけが発達するため、つきあいにくい人間となるだろう。(プラトン(藤沢令夫訳)『パイドロス』2010、岩波文庫、164頁)



# 潜在的次元

---

アーカイヴの問いは、繰り返し言えば、過去の問いではない。それは、われわれが既に所有していたりいなかったりする、過去すなわちアーカイヴについてのアーカイヴ化可能な概念に関する問いではない。それは未来の問いであり、未来そのものの問いであり、明日に対する応答、約束、責任〔応答可能性〕の問いである。アーカイヴは、それが何を意味するだろうかをわれわれが知りたくても、われわれはそれを、来たるべき時においてしか知らないだろう。おそらく。明日にではないが、来たるべき時に、もうすぐか、それともおそらく決してないか。亡霊的なメシア性がアーカイヴの概念を働かせて、それを宗教のように、歴史のように、科学自体のように、約束という非常に特異な経験に結びつける。(ジャック・デリダ(福本修訳)『アーカイヴの病』法政大学出版会,2010, pp. 56-57)